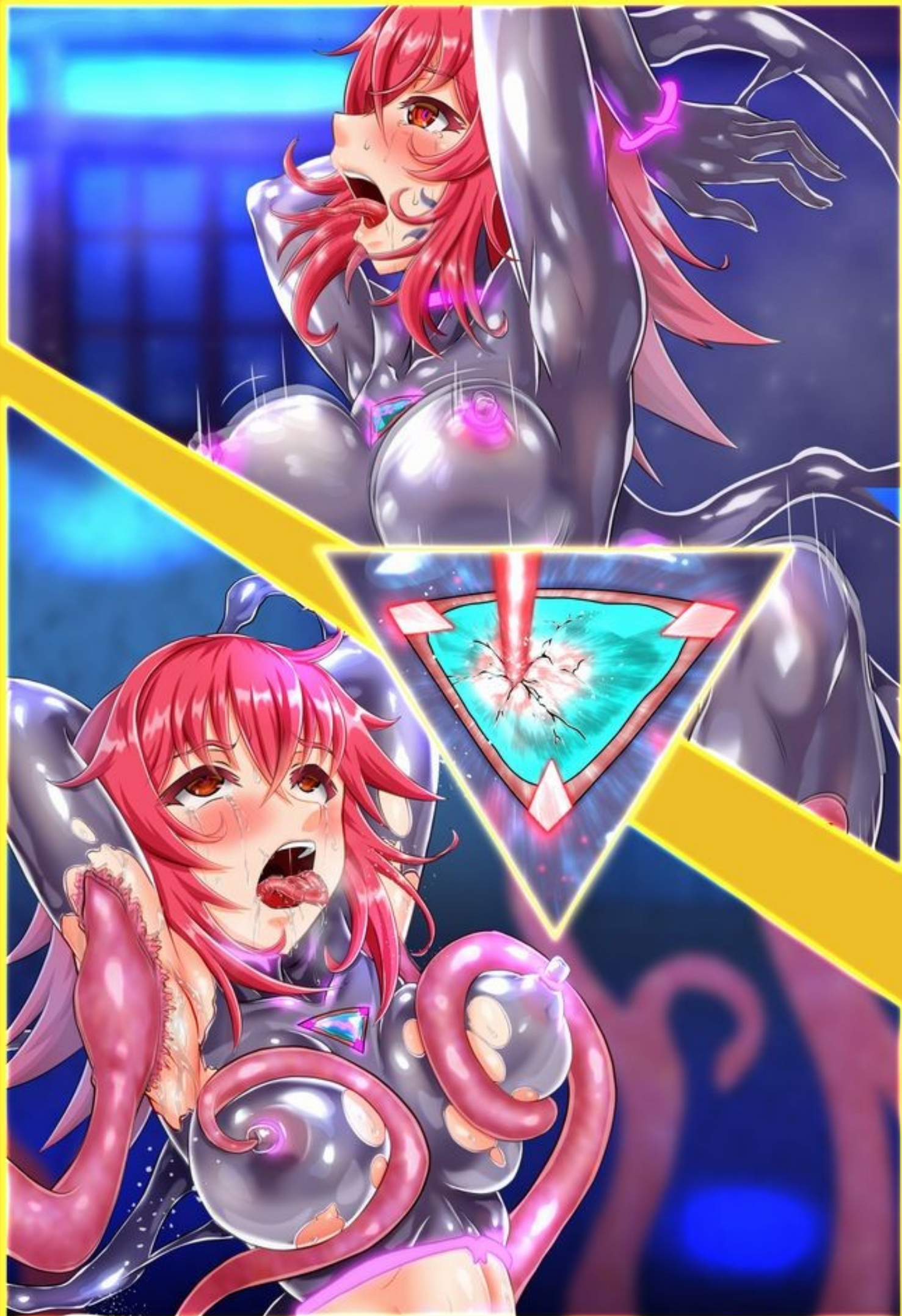




「ただいま帰りました。」

アイシャの自宅のドアが開き、カルミアが買い物から帰ってきた。

アイシャ宅では来た時は「ただいま。」帰る時は「また明日。」

と言うルールがある。

とはいえ来た者全てに強いてるわけでは無いので、なんとなくアイシャ達3人での軽いルールになっているだけなのだが。

「ルミアさんおかえりなさい。」

それに倣っていつものようにレントがカルミアを出迎える。

「レンちゃんただいま。
?アイシャはどこかしらっ。」

「かるみあ、

おかえりー!」





「……」

……

「おっと!、へへへ、
ルミアさんとうですか、驚いたでしょ?。」

「…あれ?。」

カルミアの手から買い物かごが落ちるが
それを予測していたのか、
レントが見事にキャッチする。

「え〜つと、ルミアさん、お〜い!
ん〜つと…あれ?。」



「……!!? つえ、先輩!!
なんかルミアさんから煙出てる!
変な音もしてる!
大丈夫なんですかこれ!」

「いや、こんな反応初めてみた!
ごめんカルミア落ち着いて!
冷静になつて!!
あたしここにいるからっ!!」



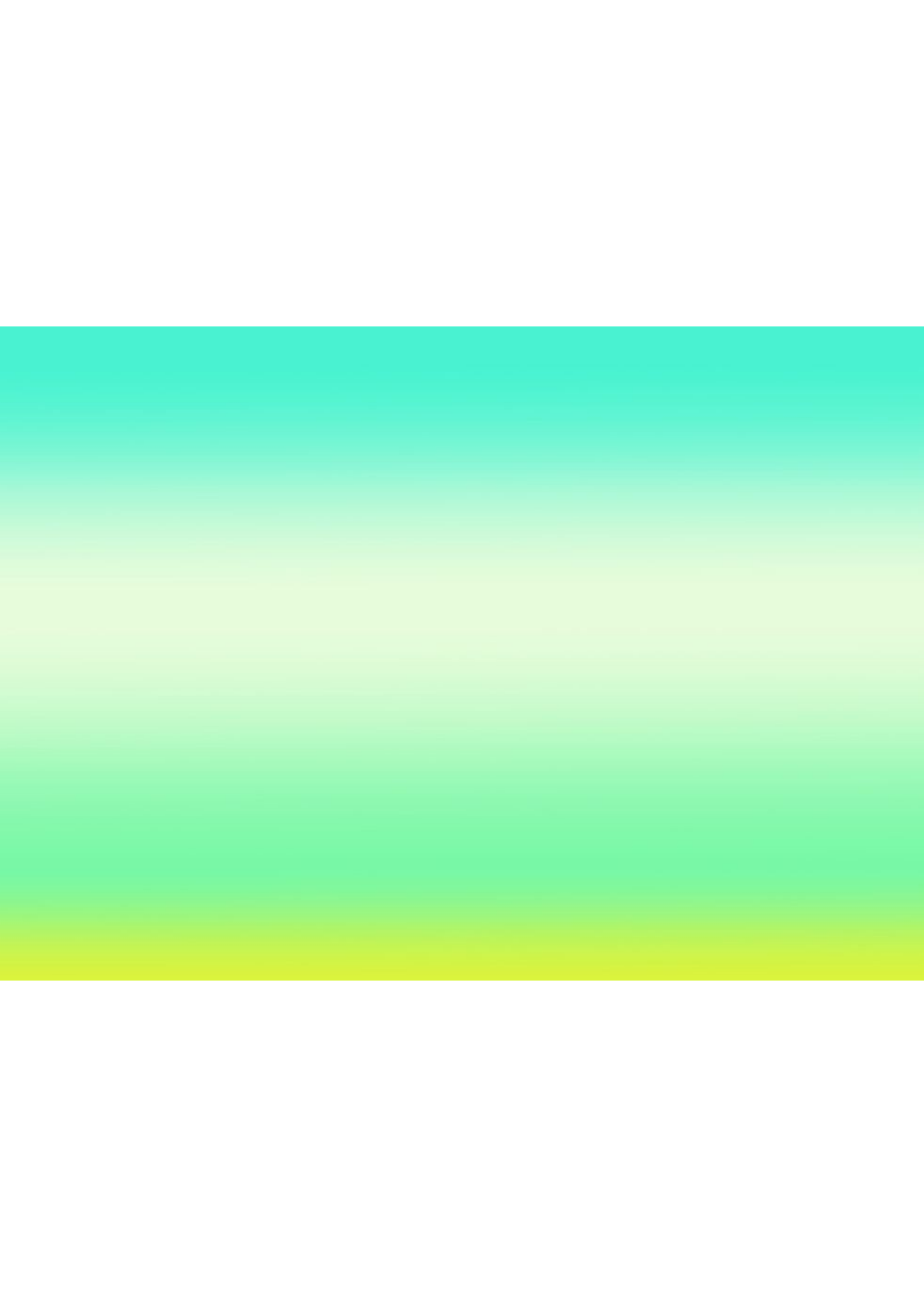
「これはマズイ、リィムごめん元に戻ってお願い！」

「はい。」



そう返事した
アイシャによく似た少女の体が
グニャグニャと形を変え、
リィムと呼ばれた少女に姿を変えた。

イ
シ



「・・・もう、本当に驚きましたよ。」

「悪いわるい、でも凄いでしょリイムの擬態能力。」

「確かに纏うエネルギーまで再現出来るなんて、
とてつもないですね。」

アイシャが仕掛けたドッキリでカルミアが壊れかけた
緊急事態から大分経った頃、
復帰したカルミアは夕飯の調理を始め、
反省のつもりでアイシャがそれを手伝う事になった。

「でも突然こんな所にあんな可愛い娘がいるって。」

私がもう少し冷静だったらすぐに
さらっ・・・

を洗いながら保護する所でしたよ。」

「・・・お前は冷静だと
随分器用に犯罪に手を染めるんだな。」

「保護ですよ、
何もやましい事はナイデスヨ。」

「それで、あちらが前に言っていた?。」

「うん、あの娘がリイムだよ。」

「ごういう展開も随分と久しぶりな気がします、
今回はどうやって説得したんですか?。」

「えっ!?!、え〜と…あ〜と…。」

「ラバーから吸うの。」

[illegible]

イ
ポ
ン

「はあっ♡、ああ♡、んふぁあっ♡♡、ああっ♡♡♡♡。」

アイシヤは騎乗位の姿勢で自ら腰を振り、スクインの触手男根を咥え込まされている、弱点の両腋を晒す無様な姿勢で、上半身と両足はスライムラバーに包まれ内部でその肢体を弄ばれていた。





マーゴ、スクインと因縁あるスライムにアイシャが捕らわれ
およそ2日が経った。

アイシャを苦しめたタロスに張り付く肉腫は
今は別の肉腫に取り換えられている。

また侵食粘液はスクインをしてこれ以上は必要無い、
と言わせるほどにアイシャの子宮内に注がれ続けた。

更にはボディハックの効果を増強する

デバイスが手足と首に追加され、
アイシャの体はアイシャの意思では自由にならず、

スクインに操られるまま
彼女の体は望まない快感を受け入れさせられ、

そのエネルギーをスライムとスクインに
吸い取られ続けていた。

「分かったよ、じゃあボクは続きを楽しむね。」

「はふあ……あ♡や……それ、あふああ……あ♡♡はひあああっ♡!」

（らめえ……このすいかた……は……ああ……♡♡♡）

イッポウ

男性寄りな性格のマーゴのドレインは色んな手段を使い、その時吸えるものを手あたり次第に貪り喰らう様な直接的で乱暴なものが多く、

女性寄りな性格のマーゴのドレインは様々な手管を使い、たとえ堪えていたとしても、次第に外堀を埋め、期が熟した時に抗えぬ快楽と共に吸収するものが多い、というのがアイシヤの経験則だ。

前者は乱暴故に短時間で事を済まそうとするため、快感に意識を奪われにくく耐えきれば反撃のチャンスも生まれやすい。よしんば反撃が無理だったとしても行為が済んだ後、放置して去るものが多い。

後者はその外堀を埋めるまでに必然的に時間を要する為、その間にいくらかでも反撃の機会を見つける事が出来る。だが外堀を埋められてしまうと快感に対して抵抗出来なくなることが多く、最悪住処に連行される可能性がある。

アイシヤはどちらかというと、後者の責めの方が苦手だった。

しかしこのスライムのドレインはどちらとも異なり、アイシヤの体を優しく探り、気持ちよくなるポイントを見極めエネルギーを吸い取ってくる。

そこにはマーゴ特有の相手を餌や食材と想像しているような、悪意が感じられず、むしろ愛情すら感じられる程だった。

ただ、スライムのドレインする力が強いのか、

アイシヤの今の状態が影響してか、

与えられるドレインの快楽が凄まじく、

容易く激しい絶頂に見舞われてしまうのだが、

そうなるスライムはドレイン量を弱め的確な塩梅で

激しい快感を心地好い快感と上手く混ぜ合わせるような動きを始め、

その刺激にアイシヤは身も心も蕩けさせられてしまっていた。

「んあ♡♡♡は…んふあ♡♡♡あん♡♡♡あふ♡♡♡」

スクインが新たに出した触手の特殊な振動が
お臍とクリトリスに注がれ、アイシヤのお腹全体を甘く熱く痺れさせ
先程よりも太くなつたイチモツの抽挿と、
腋へのブラッシングの刺激が合わさり
一気に許容を超えた強烈な快楽に絶頂に打ち上げられるアイシヤ。

だがスライムはそんなスクインが与える快感も
上手く織り込み、アイシヤの全身に波及させていく、

その度に意識を失いかける程の激感に
晒されているアイシヤなのだが、
体に広がるものは抗えぬ心地よさに変化していた。

「でもなんか苦しそうなんだけど?。」

「強引にだから……な、
体を酷使するから多用は出来ない……が、
後で休ませればいいだ……ろう。」

「ふん、ボクはあまり好きなやり方じゃないな。」

「後で休ませると言っているだろ……うが、続きをはじめろ……ぞ。」

無理矢理エネルギーを絞り出すようなやり方に
あまり納得していない風だったスライムだが。

「ボクがもつと気持ち良くしてあげればいいよね。」



んあっ! あががっ! なっあああっ!

ギャッ
ギャッ
ギャッ

ガボ
ガボ
ガボ

グジュ

ガッ
ガッ

ムプ
ムプ
ムプ

棘の先端がタロスに食い込むと棘はドリルのように高速回転を始める、タロスにはビビが入ると同時にアイシヤの体に激痛が迸る。

「んああっ!! な、ぐああっ!! ああああっ!!」

ドリルが少し食い込む度にタロスのビビが増え、その度にアイシヤの体に走る激痛は加速度的に大きくなり、先程までの悦楽が吹き飛んでしまっていた。

「ちよつと、なにしてるのさ!」

「仕上げだ!、俺をバカにした連中に俺の才能を! 力を、見せつけるのだ!」

ドリル触手の背びれの様な部分が発光する、その発光は、根元から二つ、また二つとドリル本体に近づくように発光していく。

「あぐああ！ぐあつ！あああつ！」

「この発光がニードルに到達した時、タロスは碎け、マーゴハンタは死ぬ、それを今から証明するのだ！！」



ガクガク

ジュプ
ジュプ

「ちよつと……話がつつ！違うつつ！！」。

あの頃は自分がどう死ぬか、殺されるのか、死ぬよりもひどい目に合うのかも等、考えてもどうしようもない事を考えすぎてそれが頭の中でグルグルと巡り、時には眠れず涙に枕を濡らす日もあった。

あの頃は自分がどう死ぬか、殺されるのか、死ぬよりもひどい目に合うのかも等、考えてもどうしようもない事を考えすぎてそれが頭の中でグルグルと巡り、時には眠れず涙に枕を濡らす日もあった。

「これ、走馬灯つてやつかな？」
昔の事を思い出すなんていよいよだなとだが何故かどこか冷静になつてしまう。

アイシヤは自分がこういう仕事を
している以上、こうなる事の覚悟はきちんとあった。

ただ、仲間が自分の亡骸を見た時に、
無様だったねとか、可哀そうだったね
と思われるような死に方はしたくないと
思っていた。

どんなに悲惨な状態になつていたとしても、
あの人妻かつたねとかとにかく良いイメージで
思い出しでもらえるように逝こうと
心に固く誓っていた。

だから目の前のスライムが何をしてこようが、
絶対にその矜持は貫く、
そう決意し動けぬ体でスライムを睨みつける。

そんなアイシヤにスライムが近づく。

スライムはタロスに手を伸ばすと、

「大丈夫？ ごめんね、これ苦しかったんだね。」

アイシヤのタロスに張り付けられた肉腫を
剥がしてくれたのだつた。

「なんか体冷たいね。寒い？、ボクが温めようか？」

「あ、いや大丈夫。
できれば毛布とかがあればそっちがいいかな。」

そう言っただけで体を広げようとするスライムの行為をアイシヤはやりわりお断りし、なんでもいいから羽織るものをお願いすると。

「分かった！、探してくる！」

と元気のいい返事と共に部屋を出て行ってしまふ。

「うーん、これは…どういう事だ？」

スライムはアイシヤに取り付けられたデバイスを全て取り外してくれただけでなく、これまでのダメージで頭が回らず上手く喋れなかったアイシヤが喋れる位に回復するまで何もせず待っていてくれたのだ。

その謎の行動に、さっきまでの覚悟とか走馬灯やらは何だったんだろうと拍子抜けしてしまう。

「でも、まだ油断はできないよね。」

だか相手はマールゴである、ここから何とか戦える力が戻るまでどうやって時間を稼ぐのか、それを考えなければならなかった。

「毛布あったよ、ほい。」

毛布を発見したスライムがアイシヤの肩に毛布をかける。幾ばくかの温もりに安心感があったが、冷たくなつた体はまだ震えが止まらなかった。

「まだ寒い？、
もしかしてエネルギー吸い過ぎちゃつたかなあ？」

事実エネルギーの回復がかなり遅い、こればかりは先程までのダメージが原因であり、時間が経てば必ず回復するものではあるが……でもアイシヤはなんとなくダメ元で。

「そうだね、
出来れば返してくれたらありがたいかな？」

そんな事をスライムに頼んでみると。

「うん、分かつた。」

と言つてアイシヤの手を握る、
するとそこから先程までスライムが
吸い取つたアイシヤのエネルギーが流れ込んできた。

「!?…何考えてるの?。」

スライムの行動にアイシヤは流石に困惑していた、マールゴがマールゴハンターから吸い取ったエネルギーを返すなんて自殺行為以外の何物でもない、だがこのスライムは躊躇いなくそれを行っている。

「このくらいいいかな?、あの…さっきの分を回復したいんだけど

…ちよつと貰ってもいいかな?。」

はにかみながらそう言うスライムにここまでされて悪意でやつてると疑うなんてアイシヤに出来ようはずも無く。

「いいよ、そつちは大丈夫なの?。」

と笑顔で応える事にしたのだった。

「ねえっ、あなたお名前は？」

「…ん？アイシャ・エプタだけど？」

スライムから唐突に名前を聞かれ、まああんな状況じゃあ名乗る事もないよね、と内心苦笑気味に答える。

「あいしやえぶ、えゝ、えぶ？」

「アイシャでいいよ、じゃあ貴方のお名前は？」

「ボクはリイム、やつとお名前聞けた！、アイシャ！アイシャ！」

自分の名前を嬉しそうに連呼されるのは何とも気恥ずかしいが、その時アイシャは夏のあの日に合ったスライムが何故か自分の名前を聞き出そうとしていた事を思い出した。

（あゝあれはそういう事だったのかなあ…。）

あの時は襲われていたからそうは思わなかったが、もしかしたらこのスライムはあの時ただ単純に名前を聞きたかっただけなのかもしれない。

そう悟ったアイシャは俄然このスライムに興味が湧いてしまい、

これまで何があつたのか？とか、何がしたいのか？等

小一時間程色々話をし、

アイシャはある事を決意する。

「ねえリイム、人間との共存、考えてみない？
不安ならあたしが相談にのるからさ。」

「…まあ、色々うまい事いったんだよ、うん。」

「説明になってませんが、まあそういう事におきましよう、それで居住調査の方はどうでしたか？」

「うん、問題なし、しかもエリア5で仕事も見つけたってさ。」

マーゴの中には、マーゴハンターに追われる事に耐えられなかったり、偶然人間と良好な関係を築く事が出来た故に人間を襲いたくないという考えに至った者達がいる。

そういったマーゴをアダマンティウス・リベラティオは特別区域を作り受け入れている。

場所是非公開、区域の周辺は厳重な警戒設備が設けられているが、そこではマーゴが生きていくのに必要なエネルギーが支給され、仕事に就く事が可能で、更には人間も一緒に暮らしている。

現在ではルートは限られるものの、そこでの生産品が流通していたりと一つの町として成り立っている場所なのである。

「それは素晴らしいですね。」

「人を襲った事はあるけど、
殺した事が無かったのが幸いしたみたいよ。」

特区の中は5つのエリアに分かれ、
数字が少ない程に警備と監視が厳重になる。

最初に特区に入る者は
まずエリア3で数か月生活してもらい
その間に素行やこれまでの経歴を調べられ、
その結果や生活状況を鑑みて
住むエリアが決められる。

特区入りをしても性格が乱暴な者や、
過去に多くの人間を殺した者は
要警戒者として扱われ、
エリア1や2で生活をする。

なのでエリア5に住むことになるリィムは
かなり良い評価だったという事になるのだ。

「それじゃあ、新しい友達リイムの歓迎と、あたしの勧誘スキルに、乾杯！」

「……」

「……ん？」

カルミアの調理が終わり、皆食卓についたのでアイシャが乾杯の音頭を取るが、カルミアとレントが首を傾げ頭に一杯の？マークが浮かべている。

「ちよつと、なんで止まるのよ？」

「いやだって、アイシャが前に勧誘に成功したのって50年目でしたよね？」

「は？」

「違いますよルミアさん、15年前ですって。」

「おいし。」

「アイシャって結構おばあちゃん？」

「んなわけあるか！、

50年前はあたし生まれて無いし、

15年前はレントと出会ってない！、

おまえらあたしの勧誘力をデイスるんじゃない！。

はい！かんぱい！かんぱい！……」

アイシャの強引な乾杯の音頭と共に始まった
リィム歓迎会。

リィムは初めて味わうカルミアの料理に感動したり、
皆でゲームをしたり。

アイシャ達とアドレス交換しようとしたリィムが
間違えて端末を初期化してしまうハプニングがあったり。

折角なので全員で大浴場にいらなくなったのだが、

水とエネルギーがあれば増えるという
リィムの特性を当の本人が理解しておらず、
アイシャに擬態した時にもらった
エネルギーと水分が合わさり、
4〜5倍に増殖してしまったりと――。

出会いに紆余曲折あったものの、
アイシャにとってもリィムにとっても
友人との楽しい思い出が出来た、

そんな日になったという――。

リィム

かつてアイシャに襲い掛かったスライムの現在の姿。
元は人造マーゴの研究から生まれたスライムだったが、
研究者が問題を起こしたため研究が凍結するがその期間中に
逃げ出してしまった。
その後電気を発する生物と共生関係を持ち、再びアイシャの前に現れた。

事件の後、数か月助人間と一緒に暮らしていた。
その人間に様々な事を教えてもらい、
現在の人型の姿への擬態等も確立した。

非常に高度な擬態能力を持ち、あらゆるものに姿を変える事が出来る、
またマーゴハンター等の高いエネルギーを持つ者に
擬態する際にはエネルギーをある程度分けてもらう事で、
姿形だけではなくその者のエネルギーの質も
同じ状態の擬態が可能である。

他者を疑う事が苦手な為、すぐ鵜呑みにしてしまう。
アイシャに教えてもらうまでは
相手に快感を与え気持ちよくする程に仲良くなれると
教えられていた。
(実際はその人間がスライムとの行為にハマり、
スライム中毒の様な状態でリィムにその事を吹き込んだ事が原因と思われる。)

なので食事の為に人を襲う事はあっても
快感を与えるだけで殺す事はしなかったという。
だがそれは吸収したエネルギーの持ち主に対して友愛心を持ってしまうという
リィムの特性が起因しているとされる。

現在はマーゴ特区にて宅配業を営んでおり、
人懐っこい性格とスライムの特性を上手く活用して
評判になっているという。

